哲學研究　第七十三號

文化價値體系問題（四）

米田庄太郎

第二節　文化哲學に於ける價値體系問題（續き）

上に述べし如く、輓近に始めて最とも詳細な價値體系の樹立を試みたるミュンスターベルク氏の說に於ては、價値間の位階的秩序の思想は、別に重要視されて居ないが、然るに同氏に次で詳しき價値體系の樹立を企だてたるリッケルト氏の說に於ては、價値間の位階的秩序の思想は、甚だ重要視され、價値間の位階的秩序が確立されるに非らずば、價値體系は完成したとは云はれないとまでも考へられて居る。而してリッケルト氏は先づ靜觀と活動との區別、物件と人格との區別、及び社會的と非社會的との區別等から見て、價値を二種の部類に大別したる後、更に完全終結の傾向の階段を區別し、之れに從ふて價値間に一定の位階的秩序を立てゝ居るのである。詳しくは同氏の論文 Vom System der Werte (Logos, 1913) 及び同氏の大著作 System der Philosophie. Erster Teil: Allgemeine Grundlegung der Philosophie. を閲讀されたい。尙ほ右の論文は余は近頃

「經濟論叢」に於てリッケルトの價値體系と題して詳しく紹介し、又右の大著作中にある價値體系論は、拙著「リッケルトの歴史哲學」第五章第三節に於て詳しく述べて居るから、此處では同氏の價値體系論の說述は省いて置く。

されど此處に注意す可きは、リッケルト氏の價値の位階的秩序は、一個の世界觀として立てられたものでなく、世界觀論(die Weltanschauungslehre)としての哲學の上から考察し、夫れ夫れの價値を最上價値として立てられたる個々の世界觀を、一定の標準から見て、位階的に整列すると云ふ見地から立てられたるものであると云ふ事である。此くて同氏は同氏の價値の位階的秩序に於て、第一階段にある價値は、第二階段にある價値より劣れるものであるとも、亦第三階段にある價値は最上價値であるとも云ふのではないのである。而して總ての絕對的價値は同等のものであつて、其の間に上下の別は立てらる可きものでないと考へるのである。隨ふて何れの價値を最上價値として價値體系を立てるのが、最とも正當であるかは、敢て哲學に於て決定せんとす可きものでなく、而して何れの價値を最上價値として立てられたる價値體系、つまり世界觀を遵奉するかは、種々なる理由によりて成立する個人の性格、性情、氣質等によりて決定されるものと見るのである。

余は世界觀論としての哲學に於て、リッケルト氏の云はれるが如き主旨にて、一定の見地から考察して諸種の世界觀、つまりは諸種の價値の間に、一定の位階的秩序を立てんとするは、決して非難す可きことでないと考へる。然るにリッケルト氏の說を祖述して、歷史哲學を大成せんと企だてたるメーリス氏は、リッケルト氏の云ふが如き主旨に於て、價値の位階的秩序を立てんとすることも好まないと見え、其の好著作「歷史哲學」(Mehlis, Lehrbuch der Geschichtsphilosophie. 1915) に於て、價値の秩序を論述するに當つて、價値を先づ動的値價と靜的價値とに大別し、又靜的價値の秩序を量的と質的とに別ち、而して一般に價値體系論に於て論究される價値秩序の問題を、靜的價値の質的秩序の問題として論究して居るが、同氏は位階的秩序の思想を全く斥け、種々なる方面より見て、價値を客觀的價値(例へば科學、道德、法律等の價値)と絕對的價値(哲學、藝術及び宗敎等の價値)との二部類を別つに止めて居る。つまり價値を右の二つの部類に於て並立的に排列するに止め、如何なる意味にても、其の間に位階的秩序を立てようとは企だてゝ居ない。詳しくは同氏の右著作の Zweites Buch, 2. Kapitel, §3. を閱讀されたい。但し其の稍々詳しき要旨は、拙著「新理想主義の歷史哲學」前篇(一)第三章第三節中に述べてあるから一讀されたい。

第三節　結　論

却說以上、文化哲學に於ける價値體系問題の輓近の發達を概論せる處によりて考ふれば、其の一般の傾向はさきに社會學に於ける社會現象分類論の輓近の發達に就て認めたると、同一のものであることが發見されるのである。卽ち文化根本的には、價値間に位階的秩序を立てんとする思想を斥け、彼等の間に只並立的關係を認めるに止めんとすることが、社會學に於ても亦文化哲學に於ても、今日認められる一般の傾向であると思ふ。但し社會學に於ては社會現象の並立的關係を認めると同時に、又其の相關的關係を重要視するのであるが、文化哲學に於ては相關的關係は別に重要視されて居ない樣に思はれる。是れ文化哲學に於ては、夫れ夫れの價値、例へば少なくも眞、善、美、及び聖等の價値を絕對價値と認める以上は、彼等の相關的關係と云ふことは本來重要視され得ないからであると思はれる。併し其等の絕對價値の歷史的生活に於ける具體的實現として考へられる諸種の文化價値、卽ち哲學、藝術、宗敎、道德、法律、科學、等の歷史的發達に於ては、彼等の間に密接なる相關的關係の存することは疑はれない。而して其の相關的關係を考究することは、又文化哲學の最後の、或は

終結的な學科としての歴史哲學、殊に其の普遍史の部門の任務であらうと思ふ。メーリス氏は其の普遍史の構想に於て、宗教的發達、藝術的發達、哲學的發達及び倫理的並に國家的發達と云ふが如くに、夫れ夫れの文化價値の發達を、別々に論究して、彼等の相關的關係には別に注意して居ない樣であるが、しかも彼等の間に親密なる相關的關係の存することは、同氏の論述によりて見るも、明らかに理解されるのである。而して此の事は文化價値の産出者及び運載者が、結局は人格者である以上は必然的に然らざるを得ないものと思はれるのである。

今因果原理を基礎とし、實在の因果的關係を究明するを目的とする科學としての社會學に於ては、社會現象間に位階的秩序を立てることは、さきに述べし如く不可能であるので、一時一派の社會學者の最とも重要視せるが如き社會現象の位階的分類の思想は、到底實現され得ないものであると思はれる。併し目的論的原理を基礎とする文化哲學にありては、其目的論的見地の性質上、文化價値の間に何等かの標準によりて位階的秩序を立てんとすることは、是れ亦當然なる思想或は要求であらうと信ずる。而して哲學を以て世界觀論或は世界觀學と見て、諸種の世界觀の意義を組織的に究明するものと見るに於ては、リッケルト氏の價値體系論の如きものが、立て得ら

れるのである。否な立てらる可きものと思ふ。但し余はリッケルト氏の價値體系論を以て唯一の正當なる價値體系論と考へるのではない。他の標準からして同等に正當なる他の價値體系論も立て得られると信ずる。しかもリッケルト氏の價値體系論を以て一の正當なる價値體系論と認めるのである。而して夫れによりて諸種の價値を夫れ夫れ最上價値と認めて立てられる箇々の價値體系、卽ち世界觀の意義が、組織的に闡明されると考へるのである。

されど今若し文化哲學に於て、余が最ともよく滿足し得る一の價値體系、詳しく云へば價値の位階的一秩序を立てんとするならば、どうであるかと云ふに、余はメーリス氏がリッケルト氏の說に從ひ、又ヘーゲルの說を參考して立てたる絕對的價値と客觀的價値との區別を承認し、其の絕對的價値と稱せられるもの、卽ち哲學、藝術及び宗敎等の三種の文化價値に於て實現される眞、美及び聖の三價値を以て最上位にあるもの、つまり終極の目的價値であると解し、而して其の客觀的價値と稱せられるもの、卽ち科學、道德、法律、經濟等の文化價値に於て實現される價値を下位にあるもの、つまりは手段價値と解したいのである。此くて余の價値體系論或は世界觀は、外面上ヘーゲルの世界觀やシェリングの世界觀に類似するものとなる。併し余は眞、美及び聖

の三價値を以て共に嚴密なる意味にて云ふ絶對價値と認め、彼等の間に位階的秩序を立てず、彼等は共に絶對的價値として同等なるもの、相並立するものと見るのであるから、余の價値體系論は眞價値を美價値や聖價値の上に置かんとするヘーゲルの説とも、亦美價値或は聖價値を以て眞價値の上に置かんとするシェリングの説とも異なつて居るのである。要するに余は其等の三價値の何れかの一を、最上價値と認めるのでなく、三價値共に最上價値であると認めるのである。而して價値は實在するものでなく、妥當するものである以上、最上位にあるものを三つ認めるも、決して背理的でないと考へるのである。

尙ほ余は客觀的價値の完全なる實現によりて、シュタムラー氏の立てたる社會哲學の理想、卽ち「自由に意欲する人間の共同生活」が完成されるものと考へるのである。シュタムラー氏の説の詳細はStammler, Wirthschaft und Recht. Dritte Aufl. 1913を閲讀されたい。又其の稍々詳しき大要は拙著「輓近社會思想の研究」上卷第一篇を閲讀されたい。

要するに余はシュタムラー氏の「自由に意欲する人間の共同生活は社會生活の理想、卽ち社會理想であるが、併し又人類理想を完全に表示するものでなく、自由に意欲する人間の共同生活に於て、三つの嚴密なる絶對的價値、卽ち眞、美及び聖を完全に實現すると云ふことに於て、完全なる人類理想が完成されるものと考へるのである。而

して此の點から考へると、輓近の社會思想の發達の歸趣が明らかに認められるかと思ふ。卽ちマールクス說に滿足せずして一步進んだ思想家は、マールブルク派の社會哲學殊にシュタムラー氏の說に從ふて新理想主義に達したのであるが、併しシュタムラー氏の立場では到底安住し得られるものでない。自由に意欲する人間の共同生活は社會生活の理想、つまり手段的理想であるに過ぎない。自由に意欲する人間の共同生活に於て、自由に意欲する人間が、何を意欲す可きか、或は何を意欲せねばならぬかと云ふ問題は自から起らがるを得ない。而して其の意欲す可き、或は意欲せねばならぬものと云へば、夫れは卽ち眞、美及び聖の絕對的價値の自由なる實現、卽ち哲學、藝術及び宗敎の自由なる發展の外にないと考へられる。要するに余はマールクスよりシュタムラーに進んだ輓近の社會思想は、更にリッケルトまで進まなければ、到底安住することは出來ないと考へるのである。マールクス派――マールブルク派――西南獨逸派。是れが卽ち輓近の社會思想の發展し行く途であると思ふ。

余は右に述べし主旨に於て、余の價値體系論を立てんと企てゝ居るのであるが、詳しくは他日の機會に讓り、本論文に於ては、余が社會學及び文化哲學に於ける價値體系問題の發達の一般的傾向と、認めるものを概論し、且つ此の問題に關する愚見の主旨を簡單に述ぶるに止めて置く。（完結、大正十一年三月九日）